

公はいつそのこと死による終末を望む。夢というシュールリアリズムが好んだ舞台を借用して細かな点描で生み出されたイメージが、ソラリスの海が生み出すミモイド等と重なり合い、鮮烈で見事だ。

レムは人類という生命体の特権視することはなかった。また曖昧な神秘主義に陥らず、サイエンス・フィクションとしての正確性に執着した。このような厳格な認識がもたらす緊張感、小説では執拗なまでの観察や論理となって現れている。海が生み出した4mの子どもの体の動きが不自然だったと過去の探検隊の隊員が説明する場面がある。小説では、言葉と論理を尽くしてその不自然さが正確に

伝えられており、レムの本領が発揮されている。この名場面に、コミックスではわずかに2分で挑んでいる。小説とコミックスの対決とも呼ぶべき瞬間である。

地球の現実を超えるような事象が取り扱われているが、レムは戦争の時代を生きた人物であった。海が生み出した「対称体」が崩壊を前にキノコ雲となり、その残骸が廃墟のような姿をさらすところはコミックスでもとらえられている。

分断と排除と戦火が世界各地で再び深まっている現在、迫真の筆致でレムの世界に挑んだこのコミックスをぜひ手に取っていただきたい。

(宮風耕治、ロシアSF翻訳家、大阪市)



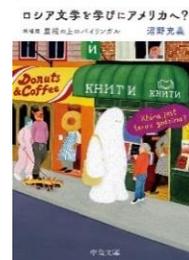
新刊
紹介

『ロシア文学を学びにアメリカへ？』

増補版 屋根の上のバイリンガル』

沼野 充義 (著)

中公文庫 2025.1, 白水社 1996.3, 筑摩書房 1988.4



『屋根の上のバイリンガル』として1988年に初版刊行。今回「はじめに」「ハーバード生活から、三つのエピソード(あとがき)」といくつかの章へ「中公文庫版への付記」を書き下ろした増補版

今、トランプ大統領によって、ハーバード大学に留学する外国人に入国を制限することになり、日本からの留学生も他の大学への変更を余儀なくされています。

著者の沼野充義さんはロシア文学専攻でありながら米国のハーバード大学に留学し、学内だけにとどまらず東欧系移民や亡命作家たちとの交流から得た豊かな体験談を起点に、亡命者・移民・多言語話者の文学や言葉を縦横に考察しています。

移民の言語事情やアイディッシュ語など、ときに複雑なテーマを扱っているのに著者のユーモアで、難しい話題が丁寧かつ、読みやすく解き明かされます。21世紀のいまこそ改めて読むべきテーマであり、ロシア(スラヴ)界隈に興味があってもなくても得るものはとても大きいと思います。かつては「バイリンガル」そのもののイメージや社会評価がそれほど肯定的ではなかったということも初めて知りました。

著者は、土地に詳しいわけでもないのにアメリカを車で移動し、憧れの作家に会いに行きます。ヨーロッパでは、フロント・ガラスが割れても修理して東西ベルリンの壁も越えるのです。その行動力と軽やかさに圧倒されます。街の人々の生き生きした姿が活写され、こんな留学生活もあるのかと目から鱗が落ちる思いでした。

スラヴ語など日本ではマイナーな言語についてなど、とても興味深かったです。ハイネの詩は独語

であるからこそ意味をなし、仏語、英語では別物になる。日本ではバイリンガルは良い意味で用いられるが、海外では貧しい移民の象徴で見下された概念という。多言語社会であるアメリカでさまざまな言語を操り人と交流する喜びを、その背後にある歴史や文化を考察しながら軽やかに楽しく描写していて、少なくともかつてのアメリカは多様な文化を受け入れる度量や、大らかさが残っていたのだと思います。

ウクライナが確固とした民族意識を持った人たちであることとか、ヨハネ・パウロ2世がポーランド出身の初の教皇として就任した話とか、現在のウクライナ戦争や、フランシスコ教皇逝去の話とリンクして、現代とつながりました。

えっ、こんな人たちとも交流があったの？ という方も出てきます。有名な人では日本文学専攻のロバート・キャンベル。ハーバード大学の同窓で、東大で国文学を教え、国文学研究資料館の館長を務めました。ハーバード大学が果たしてきた役割を失ってはならないと思います。

トランプ政権の独断的な政治で、自由であるべき学術研究の世界は、ハーバード大学を筆頭としてどうなるのだろう。あとがきに引かれていた旧知の亡命ロシア人のことば「これから四年の間に根絶やしにされてしまうほど、アメリカの知的制度はやわじゃないさ」に希望を持ちたい。(樋口みな子、会員)

(『銀河通信』246: 2025.7* より転載)

『ロシア文学を学びにアメリカへ?』は、その野心溢れるユニークなタイトルに心惹かれるものがある。“ロシア文学を学びに行くのなら、本家本元のロシアへ”というのが王道なのだろうが、筆者はその選択はしなかった。というより、筆者にはその選択肢は無かったのだ。

時は、1980年代前半。東西冷戦による激しいイデオロギー対立が続く中、当時のソビエト連邦に日本から渡り、ロシア語やロシア文学の研究のために正規留学する事も困難であり、ましてや、筆者の関心の深い反体制作家やソ連からの亡命作家(ソルジェニーツィンやナボコフ、プロツキー)の作品はソ連国内では発禁処分の対象となり、ソ連に留学しロシア文学を研究する門戸は閉ざされかけてしまう…そんな中、筆者の中にひらめいたのが「ロシア文学を学びに、アメリカへ」留学するという道だった。

アメリカに留学すべく、フルブライト奨学金の選考面接を受けた筆者…「ロシア東欧文学を中心としながら、亡命文学やアメリカや日本の文学も視野に入れる」という研究計画を発表し、これに関心を寄せた評論家の江藤淳氏との出逢いに運を加勢され、フルブライト奨学金を得、ハーバード大学のスラブ語スラブ文学科博士課程への留学の道が拓かれた。

太平洋を渡り筆者が最初に踏んだ地は、アメリカ大陸の東端・ニューヨークのマンハッタンであった。「人類のつぼ」「サラダ・ボール」と形容され、世界各地からの種々多様なバックグラウンドを持つ人種や民族の人々を受け入れ続けるニューヨークという都市を筆者自身は「人種の Patchwork」(パッチワーク=つぎはぎ細工)と形容する。

マンハッタンからブルックリンに定住の地を移して根を下ろし始め、多種多様な人種の人々、言語、文化が行き交う中で、ブルックリンの街の一角に**ブライトン・ビーチ**というロシア系ユダヤ人の住むエリアを見つける。ロシア語を学んでいた筆者は、この

エリアに住む人々の話すクロアチア語を聴き、同じスラブ言語の単語の響きに親しみを覚え、次第に、このエリアに住むユーゴスラヴィアにルーツがある人々と英語を使いながら、彼らのコミュニティの中に入ってゆく。

さらに、筆者の探求は、これだけにとどまらない。この地に住むロシア系ユダヤ人の人々の話す共通言語の**イディッシュ語**を学び、そこから見えてくるイディッシュ語の世界の中に、このアメリカの地に息づくユダヤの人々の作り上げる文化の足跡や、ロシア語や英語との接触の中で、イディッシュ語がどのようなアイデンティティを確立していったのかをたどってゆく…。

アメリカに留学した筆者は、言語の世界という**内的世界の探求**にとどまらず、アメリカ大陸の各地に出掛けてゆく**外的世界の探求**にも行動領域を広げてゆく。旅先のインディアナ州に**ポーランド**を発見する。**ワルシャワ**と名付けられた、その小さな田舎町は、ポーランドからの移民が移り住んだという背景から、アメリカに存在しながら、ポーランドの由来を持つに至った由縁を知るに至る。

探険・探求するとは、自らの足で外に出掛け、生きた実態に触れるという**外的世界の探求**であるとともに、**言語**のように、その地に息づく実態を探ってゆく**内的世界の探求**でもあるのだと深く感じさせてくれる一冊である。そして、それらの内的・外的探求を通して**自分とは一体どんな存在であるか**を確かめるに至るのだと教えてくれる一冊である。

(小池敏大、会員、岐阜県高山市)

遠く遡る一九八八年の筑摩書房から『屋根の上のバイリンガル』初刊行の折、私事ながら、湘南から小樽の地に移住した(三千枚のレコードと一万冊余の蔵書と共に。思えば、この一万冊余の中に沼野充義著作が既に何冊か潜んでいる。長い沼野充義フリークと言って憚らない)。

まさに恍惚と不安の昂揚期の只中だったので、新天地に身を置いての心身の心躍り、躍動! という共通項が新鮮で、「屋根の上のバイリンガル」というユーモラスな表題からも、沼野充義が屈託なく、言語から言語に風のように亘るヴァイオリンを、地球の屋根に座ってジョゼフ・スタインの演出なしに、のびやかに弾きつづける様が、本からありあり立ち昇って、新しい地で新しい生を探っていた私をどれほど優しく鼓舞したか知れない。

次の白水社 U ブック版も当然購めているので、中公文庫版はまず増補の「ハーバード生活から、

三つのエピソード」の頁を繰った。ヤコブソンが「君に教授が務まるか?」とナボコフを強硬に排斥したという逸話他が取りあげられている。「ユー・アー・ラッキー!」「人生で一番美味しかった煙草」の二作も卓抜のエッセイで相も変わらぬ艶やかさだ。

二〇二五年のあとがきの筆致の流麗は、一九八八年の筑摩版の初々しくも梅檀(センダン)既に双葉より芳しかった本文の飄逸精緻を、その後の三十七年の歳月がさらに磨きあげて、読者の胸に優しい取捨馴致をもたらすものだ。その文章の精度の豊潤。たとえばナボコフを追い落としたヤコブソンにしても、

エッセイの最後に、狷介な学者として糾弾するのではなく「ぼくは内心自分のことをヤコブソンの孫弟子だと、ちょっと誇らしく思うことにしている」と穏やかに締め括っている。その文章作法の優雅。沼野充義の書くものは奔放闊達でありながら万遍なくその気配りが潤澤に行届いていて温かい。それは半世紀変わらない沼野文学の揺るがないセオリーだ。

さてこのたびの増補版の三篇への手放しの賞賛はさておいて、一九八八年、九六年の刊行時にあれほどバズった本文本篇の魅惑的エッセイに触れよう。この『ロシア文学を学びにアメリカへ?』はこれまで私達が手に取って眼にしている数多の作家達の身辺留学記とは、その趣きを全く異(こと)にしている。まさに「言葉」をその中軸に据えて一步も日常身辺小説の安易に流されていない。ロシア語は無論のこと、欧米語、東欧語への果敢な挑戦は読み進めて小気味よく快い。

とりわけポーランド語への傾注は著しい。本篇二十八章の中の五分の一以上の章が「ポーランド!」に拘泥して費やされている。アメリカには五百万人以上(二〇二一年のある統計によれば八百八十一万人)のポーランド系の人口があって、彼らのもたらしたポーランド語の固有名詞の数々は確実にアメリカ英語の一部になっているのである(「アメリカの中のポーランド」から引用)ということなら、それは必然とも言えるのかもしれない。としても、沼野充義のポーランド愛、量り難いほどに深い。ワルシャワという名前の街がアメリカのインディアナ、イリノイ、ケンタッキー、ミズーリ、ニューヨーク、オハイオ、ヴァージニア各州にあることを知ったのも、沼野の著作によってだった。

さらに瞠目するのは「シカゴ!」だ。その中心部から北西に広がるミルウォーキー通りには巨大なポーランド人街があり、その人口、五十万とも七十五万とも言われ、その居住区域に足を踏み入れるとポーランド語ばかりが聞こえてくる——というトリビアも、私はこの本から得た。シカゴは首都ワルシャワに次ぐポーランド系人民人口とも知った。以降、マイケル・ジョーダンの活躍したシカゴ・ブルズ黄金期にも、映画『シカゴ』のアカデミー賞受賞時にも、私の脳裏に強く蘇ったのは、この「ワルシャワからシカゴへ」だった。淡々と描かれながら、強い衝迫を得た章だった。カフカ『アメリカ』のカール・ロスマン少年のストーリーそのまま、迫害を受けたポーランド人の求めた新天地が「シカゴ!」だったに相違ない。

新版の「がんばれイディッシュ語」は、このたびさらに補論が付加されて、胸踊る興味深さだった。「イディッシュ」への沼野の熱が今再び本文以上の濃厚、濃密さで伝わってくる。ドイツ語方言として取り扱われがちだが、イディッシュはまさにユダヤ語であり、東欧ユダヤ人の母語であると断じている。潔い断定に胸が熱くなる。特筆すべき章と思う。

類い稀なポリグロット沼野充義の、彼にしか書き得ない言葉のヴァイオリン旋律に、是非耳傾けて欲しいと熱望する。けだし名エッセイである。

蛇足ながら、今、私は沼野充義・恭子夫妻の編訳、現代ロシア小説傑作選『ヌマヌマ』(河出書房新社 2021.10)にもはまって抜けだせずにいる。これも加えて推したい。怖るべしヌマ! ヌマ!

(文中敬称略)

(長屋のり子、詩人、会員)



新刊
紹介

『いまは、ここがぼくたちの家：
ウクライナから戦争を逃れてきた子ども』
バルバラ・ガヴリルク(文) マチェイ・シマノヴィチ(絵)
田村和子(訳)
彩流社 2024.12



本書を読んで、私は自分の子ども時代を思い出しました。主人公のローマン君が、故郷のウクライナでの戦争の恐怖に加えて、避難先のポーランドで、レッテルを貼られて、どうせ言葉が分からないだろうとクラスメイトからいじられるのは、避難してきた子どもたちにとって絶望でしかないでしょう。気持ちが追い詰められてしまいます。

私は父の仕事の関係で全国を転々としました。具体的には、兵庫県、大阪府、愛知県、東京都、千葉県、そして北海道で暮らしています。また、社会人になってからは、マレーシアとシンガポールに14年間住みました。移動を繰り返したことで、その地域の文化や習慣を知り、考え方の違いに気付く

ことができたので、今は転校に感謝しています。しかし、苦労も多くて大変でした。

まず、レッテル張りに苦労しました。私は小学4年生のとき、1980年初頭に兵庫県の宝塚市から札幌市に転校してきたのですが、当時は漫オブームでした。そのため、転校した小学校のクラスでは

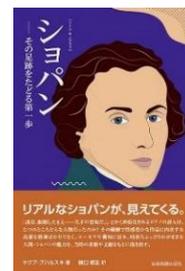


新刊
紹介

『ショパン—その足跡をたどる第一歩』

ヤクブ・プハルスキ (著) 関口時正 (訳)

全音楽譜出版社 2025.4



本書は「リトル・モノグラフ」と銘打ったショパンの伝記である。時系列順に並んだ細かいエピソードが彼を取り巻く人間関係や当時の世界情勢などと絡めて描かれ、作曲家ショパンの人物像が生身の人間として蘇ってくる。

ショパンは祖国ポーランドを後にしてウィーンに向かったが、当時のワルツ一辺倒に染まったウィーンでは受け入れられず、苦渋を味わった。十一月蜂起の報に、帰国して自分も参加するか思い悩む。家族に説得されウィーンに残ったショパンは、演奏会のチャンスを探求めてサロンに出入りし社交生活に励んだが、本心は「サロンでは涼しい顔を装ってはいるが、家に戻ればピアノに向かってあたりちらしている」という極端な激情に揺さぶられていた。

その後に向かったパリでは、一転して一流サロンに出入りし上流階級への仲間入りを果たし、ポーランド亡命者として成功する。ショパンはサロンにおいて、リストやメンデルスゾーン、カルクブレンナーなどと交流し、職業音楽家として自立していく。

晩年、ショパンはジョルジュ・サンドと共に夏はノアンで過ごすようになるが、もともと病弱だった上、進行していた病が確実に彼を蝕む。本書では、臨終の様子を、臨場感あふれる形で描くことに成功しており、読者に彼の人間性を感じさせる。

本書の特徴として、ただの伝記で終わらず、ショパンがピアノ音楽をどのように別次元に引き上げたのかということも詳述されている。例えば、ノクターンにおいて、その始祖であるジョン・フィールド(1782-1837)の作品にショパンがどのようなアイデアを加えたのか、また、練習曲というジャンルに与えた表現や技術的な書法が説明されている。

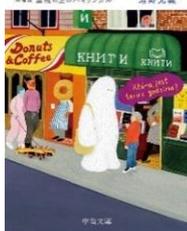
ショパンは練習曲やノクターンといった従来のジャンルだけでなく、バラードなど新しい音楽様式の作品も作曲したが、本書ではなぜ彼が新たな形式を必要としたのか深掘りしていて大変興味深い。

著者はショパンのバラードについて、ミツキューヴィチの詩作品との関連を否定し、バラード以前にショパンが作曲していた優雅な作品とは対照的に、より深みがあり、ロマン主義に源泉を辿ることができるとしている。さらに、ショパンはロマン主義をより広い意味で捉え、「靈感、幻想、出来事の目まぐるしい変化に従う自在な語り」を音楽のみで表現するために新たな形式を必要としていた。それはソナタ形式のような既成の型ではなく、語りに必要な分だけ自由に展開できる形式であった、と主張している。

作曲家としての活動を軸に、ショパンの私的なエピソードが散りばめられているのも本書の特色である。彼を支え続けたフォンタナとの微笑ましいやり取りや、婚約直前だったヴォジンスカとのエピソード、サンドと破局する原因の一つとなったサンドの娘、ソランジュについて書かれた手紙などから、ショパンという人間の多様性が浮かび上がってくる。

巻末には最新のショパンの研究史が掲載されており、ショパンについてより深く知りたい方には大変参考になるだろう。演奏家はもちろん、彼の音楽の愛好家にとっても、その作品の聞き方の幅を広げてくれる一冊である。(徳田貴子、ピアニスト、会員)

ロシア文学を学びにアメリカへ?



『ロシア文学を学びにアメリカへ？

増補版 屋根の上のバイリンガル』

沼野 充義 (著)

中公文庫 2025.1, 白水社 1996.3, 筑摩書房 1988.4

大阪のJR鶴橋駅の商店街にある『カナリヤ』というカフェは、今も変わらず人気です。ここのチョコレートパフェは大きくてとても美味しいと、大学のクラスの女友だちが話していました。甘党だった私は「ぜひ!」と思い、友人たちと食べに行くことにしました。1990年代のことで、「食べログ」などによるインターネットからの情報などはありません。カフェに向かう電車内で、パフェはそれなりに大きくて、カフェのある鶴橋の

商店街はオシャレなのだろうとイメージしていました。

鶴橋に到着後、イメージは覆されました。まず、『カナリヤ』のパフェは60程ぐらいいあって、大きいのではなく巨大でした。次に、鶴橋駅の商店街は活気のあるコリアンタウンでした。商店街のアーケード内では定番のキムチやカクテキなどが量り売りされていて、色とりどりのチョコリがハンガーにかかっている、そして路地裏にはハンダで表示された焼き肉屋さんが並んでいました。大阪の中に

外国人コミュニティがあることを初めて知り、興奮してエリア内を歩き回ったのでした。

これがきっかけで、私は外国人コミュニティに関心を持つようになったのです。外国人コミュニティの基となるオリジナルの文化はどのようなものなのか。そのコミュニティはなぜ他国にできたのか。そして、そのコミュニティとオリジナルの文化はどう違うのか—そんなことを知りたくなりました。その翌年、大学2年生のときから、私はバックパッカーとなって海外をさまようのですが、行く先々で外国人コミュニティを探します。インド・コルカタ(当時はカルカッタ)のチャイナタウン、フィジー・スバにあるリトルインディアなどを訪れました。当時の私はコミュニティを探して到着することに精一杯で、大して学んでいなかったと思います。しかし、訪問を重ね地元の方々からの教えや書籍やインターネットで調べているうちに、私なりの探求学習が確立していったのです。

本書に惹かれた理由は、私の海外在住の始まりが沼野先生と似ている気がしたから、そして先生の探求心に大いに共感できるからです。

沼野先生は博士課程でロシア語・ロシア文学を専攻されていて、総仕上げに向けてソ連で学ぶ必要があると考えます。しかし、ソ連との交流が困難なこと、そして政治的な理由から研究テーマが限ら

れることから、アメリカで研究することを選択しました。アメリカにはソ連から亡命した学者や作家が多いからです。また、スラヴ・東欧諸国からの亡命者・移民がいることも好材料と思われたそうです。

私も英語を身に付けるためアメリカ留学を考えたのですが、費用が高いため、当時は廉価で英語を学べる準英語圏のマレーシアで働きながら学ぶことにしました。東南アジア諸国へのアクセスが良いことも選んだ理由のひとつでした。私は元々地歴科の教員で、ヒンズー教やイスラム教や仏教が融合する東南アジア文化に強い関心があります。

「アメリカの中のポーランド」「ワルシャワからシカゴへ」「英語は話せなくてもいい」の連続する3章は、特に素晴らしいです。ポーランド人街を確認するために、留学先のボストンからシカゴに向かう様子や、ポーランド人街を調査する様子などは、読んでいてワクワクします。シカゴに世界最大のポーランド人街があるとは知りませんでした! 興奮して、すぐにネットで確認しました。ぜひ訪れて、沼野先生のお考えや視点を参考にして、自分はどうに捉えられるかを確認したいです。

このように思っていたら、幸運にも、この2月にボストンへの出張があって、しかもシカゴ経由です。シカゴにあるポーランド人街に行き、ワルシャワとの違いを確認したいと思います。(齊藤賢人、会員)

『Домой—戦後 80 年・語り部 100 歳シベリア抑留者たちの声 ダモイの喜びと鎮魂の叫び—ろうそくの炎が消えるように亡くなった仲間へ』 シベリア抑留体験を語る会札幌* (編集/出版) 2025.10

大東亜戦争から 80 年、その 10 年前から抑留体験者の声を聴こうとして戦争の愚かしさを伝えてきたこの会の活動に驚かされた。戦後の間もない時には北方、南方を問わず捕虜としての抑留談はよく聞かれたのだが、体験者が高齢のため少なくなりその話への熱も冷めたころから、講演会を全国で開き資料を道内の高校、図書館へ送るなど、見事なものを感じる。

私も3年前から毎年8月の「シベリア抑留北海道慰霊祭」のお手伝いをするようになったが、改めてこの本のおかげで生々しい体験者の声に教えられることが多く、この活動にさらに不戦、平和を求める気持ちが強くなった。ありがたいことである。と同時にこの本の完成には大変な努力があっただろうと思う。本の内容は9名の**体験者の講演、会員の声、抑留の資料**である。後世のために貴重なものだ。

シベリア・モンゴルの抑留は酷寒・飢餓・重労働がよく知られている。しかし2千か所の収容所の在り様はそれぞれ違って、各人2年から4年半の体験談はより詳しく知らされる。ただ一様に語られるのは、この理不尽な運命を呪い、一日も早い帰

国を望み、戦争はしてはならぬものだと語っていることだ。現在はほとんどお亡くなりになっておられるが、まだお元気にシベリアに残されている遺骨の収集に国に熱心に働きかけている方もおられる。

この9名の語り部の中に、5年前まで活動していた「北海道自分史友の会」の会員さん2名を見つけた。私も会員だったので平成29年の総会の写真を見ると、そのお二人と共に撮ったものがある。そのころ、現在のように抑留に関心があればどんなに良かったかと思う。色々な話が聞けたことだろう。友の会で毎年発行された作品集を今読み返して、この記念誌とはまた別の話が出ていて、4年間の抑留の日々では語りつくせないことが多々あったのだら



* <https://www.facebook.com/profile.php?id=100064714747555>